

【編集後記】

コロナウイルスの感染拡大は、たんに疾病の伝染たるに留まらず、まぎれもなくネオリベ政治の所産である。そして資本は、隙あらば、この「災害」を金儲けに利用しようとしている。ナオミ・クラインというジャーナリストは、狡猾で貪欲な災害資本主義の本性を暴いた。他方で、コロナウイルスは、合理的認識を超えて、「危険」だという集合的恐怖が煽られ、感染者が、名指され、忌避され、隔離されて、死んでも肉親が棺の側で別れを告げることができないという、残酷な世の中になっている。特定の商売や職業や、ホームレスなどの下層民への偏見が煽られ、露骨な排除が行われた。そして、「だれか」がにんまりとほくそえんでいる。

ウイルスへの「怯え」を煽って人心を操作し、感染者を社会周縁に追い立て、もって社会秩序を創出するというメカニズムは、「コレラ」への「怯え」を煽り、感染者を「不浄」なものとなし、その烙印を下層民に貼り付けて人々を排除した、日本近代の支配のメカニズムと同じものである。その歴史に部落差別の構造の原型をみるのであり、私たちは、時代を超えて、また部落差別問題を超えて、弱い立場の者がそのように排除されていく支配のメカニズムが、つねに作動していることを忘れてはならない。

それは、かつての(前近代の)それとは異なる「不浄」観であり、近代国家形成の中で、権力の手により、「合理的」な装いを纏った西洋医学と公衆衛生思想をもって「構築された」ものである。下層民をあらためて烙印し、社会周縁に追い立てていく、そこで動員されたものこそ、近・現代の「ケガレ」観である。

私たちは、このような近・現代に内在する隠れた暴力がいつ、どのように現出し、だれがそのいけにえとされるかを、たえず監視する必要がある。ネオリベ資本と国家とはそのようなものであり、私たちはそれらの手のひらの上で、いつでも排除されかねないリスクと背中合わせで生きている。

現代の部落差別問題を勉強するにおいて、このような、近・現代批判のまなざしは不可欠である。近代国家はそもその初めより、人民を内と外に包摂し排除することで形成されたものであり、資本主義と国家(ナショナリズム)が続くかぎり、その欲望に終わりはない。部落差別問題の勉強において、このような認識は不可欠である。(A)